

『イタリアとルルド 巡礼の旅』

マリア・ローザ 大道 紀美子

昨年の秋、ロザリオの月に聖ピオ神父ゆかりの地と聖地ルルドの巡礼をいたしました。聖パウロ修道会の神父様、宮崎カリタス修道会会のシスター併せて十二名の家族的な恵まれた旅でした。

聖ピオ神父ゆかりの地、サン・ジョバンニ・ロトンド——

二〇〇二年六月一六日に列聖された聖ピオ神父様のご存知の方も多いと思いますが、私は存知ませんでしたので、旅をする前に小冊子を読み、ピオ神父様の心に触れたいと、強く感じました。ピオ神父様（一八八七年〜一九六八年）は受難の印（聖痕）を受けられ、昇天直前まで五十年間も、人々を回心へと導くため、毎日十五、六時間も祭壇と告解室で過ごされた方でした。

ミサでは神父様は生きて、ご聖体として、ご自身を捧げられ、イエスの受難を新たにされました。主

イエスと共に神様に従順そのものであった聖母マリアへの信心、ロザリオの祈りを常とし、神への従順を示されました。また祈りによって科学的に説明のつかない数々の癒しをもたらされ、奇跡は今でも起こっているのです。苦しむ人々のために、苦難を救済する家（大病院）を、何もないところから、神のはからいを頼りに「祈れ、頼れ、心配するな」という主の言葉に支えられて設立されたそうです。

現在ではこの辺鄙な岩の多い丘陵地に、あらゆる設備も整い、最先端の研究が進められ、ベッドは千二百床、医師四百人、看護士千二百人がピオ神父様の意思を受け継ぎ、愛の奉仕に努めていらつしやいます。そこは御聖堂や博物館もある素晴らしい病院でした。この病院で現在も従事されているピオ神父様の生き証人でもある外科女医の原先生が、二日間、私たちと共にして、ガイド役を引き受けてくださったことは、大きなお恵みの一つでもありました。年々巡礼者が増加するため、かつてピオ神父様が過ごされた室から一望できる所に、一万人を収容できる新聖

堂も建設され、感謝と賛美を捧げる人々で溢れていました。サン・ジョバンニ・ロトンドはまさにピオ神父様一色で、キリストの愛と慈しみが燦燦と降り注ぐ所でした。一方、栗や柿がたわわに実り、日本の秋を思わせる一面もありました。

聖地ルルドの巡礼・・・山あいの小さな村に貧しく病弱であったベルナデッタに、聖母マリアのご出現が十八回ありました。幼い少女は、マリア様の語られる言葉に全身全霊を持って聞き、実行し、貧しい生活、人々の無理解、自分の苦しみを一言も語らず、この素晴らしいお恵みに応えて、内的生

